



Title	インドネシア語受動態考 : その二重主語文的解釈
Author(s)	崎山, 理
Citation	大阪外国語大学学報. 1969, 21, p. 59-75
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80351
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インドネシア語受動態考

—その二重主語文的解釈—

崎 山 理

Untuk Menjempurnakan Perkara Aktif dan Pasif dalam Bahasa Indonesia

Osamu Sakiyama

Hingga sekarang didalam persoalan tentang aktif dan pasif belum terdapat persetujuan yang memuaskan antara para ahli tatabahasa. Maksudnja, ada yang memikirkan adanya aktif dan pasif didalam Bahasa Indonesia sekonsepsi dengan bahasa² Eropa Barat, maupun pihak lain memandang tidak boleh memasukkan konsepsi demikian itu kepada Bahasa Indonesia karena dalam Bahasa Indonesia tidak ada sama sekali konjugasi katakerdja yang menimbulkan perbedaan aktif dan pasif itu.

Didalam karangan ini penulis mentjoba menjempurnakan konsepsi pertentangan antara apa yang dinamai „aktif” dan „pasif” dengan mengeritik kesalahan pendapat² yang diandjurkan hingga kini. Penulis mengemukakan supaya mengistilahkan aktif sebagai „kalimat objek” dan pasif sebagai „kalimat dwi-subjek” dengan meniadakan kedua istilah yang kolot itu. Perumusan ini dapat didjelaskan berdasarkan uraian sebagai berikut:

Aku memukul andjing itu. (1) Dalam kalimat ini *memukul* dan *andjing itu* tidak boleh dipisahkan, artinja dua kata (atau dua kelompok kata) itu erat sekali hubungannya sehingga katakerdja(me-+katadasar)itu sendiri sudah bersifat berobjek(„kalimat objek”), maka kalau kalimat ini diinversikan,

Memukul andjing itu aku. (2)

Selandjutnja,

Andjing itu aku pukul (kupukul). (3).... $N_1-N_2 \cdot V$

Aku pukul (kupukul) andjing itu. (4).... $N_2 \cdot V-N_1$

Dalam kalimat (3) dan (4) ini *andjing itu* ialah subjek (N_1), sedangkan *aku(ku)* dan

pukul merupakan satu kelompok yang tidak boleh dipisahkan sama sekali. Tetapi *aku* (*ku*) berfungsi subjek (N_2) terhadap *pukul* yang tidak dapat berobjek karena *me-* itu tidak terpakai disini. Oleh sebab itu kalimat ini saja namai „kalimat dwi-subjek”. Dalam kalimat (3) dan (4) ini ada dua matjam subjek, maka satu subjek itu (N_1) boleh tidak dipergunakan kalau isi subjek itu tertentu atau tidak perlu dikatakan lagi. Tjontoh itu saja buktikan dengan kalimat sebagai berikut :

Mamak perniagakan, dan beruntung. (Dr. Hamka)

Kalimat serupa ini saja namai „kalimat subjek”. Sudah teranglah „kalimat subjek” ini berhubungan dengan „kalimat dwi-subjek”. Sekalipun demikian, *di-* (=kataganti orang ketiga yang berasal dari *dia*) nampak mulai berfungsi seperti *outil grammatical* (alat tatabahasa) untuk menundukkan bentuk pasif. Tetapi fungsi ini masih hanja sebahagian sadja, tidak berlaku untuk orang keseluruhan, padahal masih dapat dipakai untuk orang ketiga dengan arti yang tak tertentu atau hormat.

Adat orang di Minangkabau lain sekali. Bangsa *diambil* daripadaibu. (Dr. Hamka)

Di- dalam kalimat ini berarti pula *orang Minangkabau pada umumnja* sebagai subjek (N_2).

I. はじめに

インドネシア語文法において現在も尚問題となっており、又、解決がついていない事柄に能動態、受動態の表現形式に関する問題がある。この問題はインドネシア語の本来的に持つ語順の自由さ、シンタックス上・形態上の単純さに起因するのであるが、これらの原因が論者をして様々にその問題に立向かわせることとなり、能動、受動という態の区別を全く認めないもの、文法的な概念である態の形式がインドネシア語にも存在するという立場をとるもの、即ち二つの根本的に異なる意見を現出させる結果となった。しかしこれらの論のいずれもがインドネシア語の外面的な現象にのみとらわれてその内面にまで深く立入って考察しようとしなかった点では共通している。本稿の目的は、それらの論旨をたどりつついわゆる受動態として説かれている形式に関して私の新しい見解を述べようとするにある。

II. いわゆる能動態

例えば, *Aku memukul andjing itu.* <私はその犬を叩く>
 Engkau — — — <君は — — —>
 Dia — — — <彼は — — —> } (1)

をいわゆる能動態の基本形式を持った文として掲げることができる。動詞は語根 *pukul* に接頭辞 *me-* が附されて (語根 *pukul* は前鼻音化現象により *p-* が *m-* に変る) 目的語を取るべき他動詞となっている。動詞と目的語との結びつきは非常に固く、このように *me-* を伴って作られた動詞は必ず <…を…する> というニュアンスを帯び、一方、主語に対する関係は緊密ではない¹⁾。又、

この文におけるイントネーションは *Aku (Engkau, Dia)* が高めに, *memukul andjing itu* が低めに発音されることからその関係が明らかである。このようにインドネシア語のイントネーションは通常の文において最初の語(又は語群)が高く始まり, そしてそれに続く語(又は語群)で低く終るのが原則である。この (1) を今様の用語でいえば核文 (*kalimat asal, kernel sentence*) とすることによって次のような変換 (*transformasi, transformation*) を行なうことができる。

Memukul andjing itu	aku.	<その犬を叩く, 私は>	} (2)
— — —	engkau.	— — — 君は>	
— — —	dia.	— — — 彼は>	

これによって分かるようにインドネシア語では自由に主語, 述語の位置が交替し得る。このような語順転倒 (*inversi*) が可能なのは *copula* の類を全く必要としないところにもその原因はある。この例を日本語では <その犬を叩くのは私だ> と訳す方が普通であろう。イントネーションは上に述べた理由によって *Memukul andjing itu* が高く, *aku (engkau, dia)* は低い, 即ち, 動詞とその目的語とを切放すことは可換性の比較的自由なインドネシア語にあってもここでは許されない。更に, (1) から論者をしてその解釈に相違を来たさせる次の形式が変換によって得られる。

III. いわゆる受動態

Andjing itu	aku	pukul	(kupukul).	} (3)
— — —	engkau	—	(kau—).	
— — —	dia	—	(di—, di—nja).	

この形式の文は(1)において目的語であった語が主語となって語頭に出されている。この点に注目して(3)は能動態(1)の受動態であるとする考え方が起こる。能動, 受動という文法的対立概念をこのようにしてインドネシア語にも適用しようとするのであり, この文は<その犬は私(君, 彼)によって叩かれる>と解釈する。そしてこのような解釈の仕方は現代のインドネシア語文法において広く採用されている。確かにこの形式には目的語が既に存在しないという特徴はある。即ち, 動詞は *pukul* に見られるように語根のままであって, その他動詞性は最早存在しない。つまり, *Andjing itu aku memukul* という形式は文法上許されない。しかも, その動詞は人称代名詞 *aku, engkau, dia* と固く結びついており, 夫々の短縮形 *ku-, kau-, di-* があたかも接頭辞のように動詞の語根に対して附せられて用いられることも多い。その動詞の帯びているニュアンスを(1)と対比して述べるならば, (3)は<…が…する>ということである。その結びつきの固さは, 例えば他の助動詞的, 副詞的品詞を採用した時に一層明瞭となる。(1)(2)に過去を表わす *telah* を入れるならば, *Aku telah memukul andjing itu. <私はその犬を叩いた>, Telah memukul andjing itu aku. <その犬を叩いたのは私だ>* となるが, (3)については *Andjing itu aku telah pukul.* とは決してできず, 必ず *Andjing itu telah aku pukul.* としなければならない。

この(3)のイントネーションは、Andjing itu が高く、aku pukul (kupukul) が低く発音される。Andjing itu は主語であり、更に、aku pukul (kupukul) の aku, ku-は第二の主語となっている。この(3)は(1)から(2)を産み出したように次の(4)への変換を行なうことができる。

Aku pukul (Kupukul) andjing itu.)	}	(4)
Engkau — (Kau—)		
Dia — (Di—nja)		

この形式も copula は必要とせず、単に語順転倒が行なわれただけである。その際イントネーションは Aku pukul (Kupukul) が高く、andjing itu は低いけれども、Aku (Ku—) と動詞との結びつきは依然として変らない。この(4)の形式についても(3)と同様に受動態とみなされ、<その犬は私(君、彼)によって叩かれる>と一般的に解釈される。そのような受動態論者の一人 S. Zainu'ddin によれば、(3)(4)のいずれの形式にあっても andjing itu は文法的主語 (subjek tatabahasa) であり、aku, ku- は論理的主語 (subjek mantik) であるとする²⁾。もっとも文法的、論理的主語という用語の用い方をこの人は誤っているようであり、そのような用語を用いるとしても実際には逆にしなければならないと思われるが、ともかく(3)(4)に共通した意味的機能を認めた点は重要である。インドネシア語ではイントネーションという音韻的要素によって、主語、述語という文法的機能を決め切れないのである。aku, ku-という主語の外に、更にもう一つの主語 andjing itu があることによって、私はこの(3)(4)の形式を持った文を二重主語文 (kali-mat dwi-subjek) とみなそうと思う。これが以下本稿で明らかにしようとする主旨である。つまり(3)は<その犬は私(君、彼)が叩く>、(4)は<私(君、彼)が叩く、その犬は>ということであって、後者の場合、普通の日本語では<私が叩くのはその犬だ、私がその犬を叩く>と訳すことのできる文である。このように解釈することはインドネシア語の発話の線条性(連続性)にも一層添っていて相応しいといえるであろう。(3)(4)を(1)の受動態と見ることによって必然的に発生する<によって><れる>に当るような何らの形態的指標をも(3)(4)は備えていないということ、更に(3)(4)において(1)の目的語に由来するとみなさなければならない主語を全く欠く場合も少なくないこと、例えば、

Ai, ini dia datang, si Ati. Bukan sudah *saja katakan* kepadamu tadi? (Hmk, p.30)

<ほら、彼女がやって来た、アティだよ。さっきお前に私が話しただろう?>

の例において *saja katakan* (決して *mengatakan* とはしない、又、*saja* は *aku* の丁寧形)にはその目的語(彼女、アティのこと)は存在しない。しかし *saja katakan* には既に主語(*saja*)が備わっているのであるから、そのような目的語に由来する主語を敢えて省き得るのである。この二点を考えてみても(3)(4)を受動態とみなさなければならないような何の正当な理由もそこには見出せないのである。特に受動態論者によって説かれる(1)の目的語が強調されて(3)(4)の主語になるという説明は³⁾、文法上のシンタックスの概念を単純に導入したに過ぎず、(3)(4)が(1)の目的語である主語を欠く上例のような場合が多いことについては、強調されるという意味が全く

説明をなさないといえよう。

さてここに(4)について受動態とは考えずに(1)と同等視しようとする論者がいる⁴⁾。つまり(4)(1)における各語の機能は等しいと考え、両文の *aku*, *ku*-は主語, *pukul*, *memukul* は動詞, *andjing itu* は目的語であると解する。そして行為者は両方とも *aku* <私>という主語であって<私によって>ではないことを強調するのであるが、これは語順の平行性にのみ注目したために起こった考えであって、イントネーションの現われ方は全く無視されており、特に(4)において動詞が接頭辞を取らない形が現われるのを説明しようとして、目的語を必要としない自動詞が接頭辞を同じく取らない形を引合に出している。例えば *Aku pukul.* と *Aku pergi.* <私は行く>との同型性を指摘する⁵⁾。しかしイントネーションの点からいっても *Aku pergi.* は *aku* が高く *pergi* は低く、又、動詞としての機能から見ても *kupukul* とはいえるが *kupergi* とはいえないように (*pergi* は他動詞性を帯びることができない)、同様に他の品詞を入れる場合にも *Aku telah pukul.* とはいえないが (*Telah aku pukul.* としなければならない), *Aku telah pergi.* <私は行った>とできるように文の機能の点から考えてもこのような(4)(1)を同じランクのもとに扱おうとするのは誤りである。

私は上記において、生成文法 (generative grammar) で用いられる変換という用語によって能動態、受動態の論旨を紹介し、又、私の意見を明らかにしてきた。変換という語の持つ概念は、ある文を核文としてそこから派生文(二次的文)を導き出すということであって、この変換の存在が生成文法の中心的概念であるといってよい位である。しかしある文を核文とし一方を派生文とする基準は一体どこにあるのか、又、変換の起こり方における規則性についてもあまりに *ad hoc* であるという多くの人たちの批判からも分かるように、その有効性については問題とすべき点が多い。インドネシア語文法における受動態論者は、その用語はともあれ既に変換という概念の持主であった。そしてその結果彼等は態の迷路に迷いこんだのであった。私はこれまで述べてきたことから明らかなように(1)(2), (3)(4)は夫々それ自身で独立に存在している文と考えたい。つまり(3)(4)は決して(1)(2)の派生文ではないのである。そして(1)(2)に対して例えば目的語文 (*kalimat objek*)、(3)(4)に対して二重主語文、更に(1)(2)の目的語に相当するとみなされる主語を欠く文に対して主語文 (*kalimat subjek*) という名称を与えることを提案したい。^(補1)

IV. いわゆる受動態の三人称

インドネシア語の能動態、受動態の問題は、S. T. Alisjahbana の言葉を借りれば危機 (*krisis*) の状態にある⁶⁾。受動態についての問題が簡単に解消することができず、受動態の存在をめぐるかくも意見が対立した原因に三人称代名詞の短縮形 *di*-の問題がからんでいる。

三人称については(3)(4)で示したように *dia*, *di*-の外、*di—nja* がある。この場合 *di*-, *di—nja* についてはその使用に異論はないが、*dia* についてはこの使用を正規のインドネシア語文法において認める立場と⁷⁾、たとえ用いられてもそれは下衆の言葉であって誤りとする説がある⁸⁾。後者は確かに現在の言語状態を云当てているかも知れないが、*di*-は歴史的に見て *dia* に由来して

いる。インドネシア語における *dia* は確かに三人称を表わすものであるが、特定の<彼、彼女、あれ、これ>を指す以外に不確定な漠然とした<一般的な誰でも>の意で用いられることも多かった。例えば *Orang itu dihukum mati.*⁹⁾ は受動態論者によって<その人は死刑にされた>と解釈されるであろうが、もともとは<その人は(ある不確かなはっきりと分らない)人が死刑にした>という二重主語文である。同時にそれは上品な謙遜した表現法にも通じる¹⁰⁾。*Kami sampaikan peraturan Pemerintah ini kepada saudara.* <我々がこの政府条例を諸君に伝える>というよりは *Kepada saudara disampaikan peraturan Pemerintah ini.* <諸君に(口ではっきりと誰とはいいたくない)人がこの政府条例を伝える>といった方がより謙遜の感情がこめられている。このように *di-* の持つ意味は一般的な *orang* <人>に等しいが、受動態論者の一人である S. T. Alisjahbana は古くからインドネシア人社会の精神状態は事を述べるに当って人を直接指さず、その行為を指す傾向があるといっている¹¹⁾。このような表現法は古代のマライ文学に特に多い。

maka disuruh ikat dengan destar, disuruh antarkan kepada Seri Dewa Radja. (SM)
<そのお方(前文から, Sultan Mahmud)が頭巾を結ぶことを命じ、聖神王の処へ案内することを命じた>

Daulat tuanku, baik djuga bentara Tun Kesturi dititahkan pergi melihat Laksamana itu. (HHT) <閣下、式部官 Tun Kesturi はそちら様(閣下)が詔してその海軍大将に会いに行かせるのがよろしい>

jang tiada disangkakan boleh mendjadi, dan jang disangkakan tiada mendjadi. (HA)
<人が考えてもいなかったことは起こり、人が考えていたことは起こらない>

di- の用法はこのように三人称といってもその範囲が広い。或いはその意味の故に文が曖昧になることも起こる。*di-* の持っていた謙譲、尊敬の敬語的ニュアンスは、それが文中で使われることによって、それがもともとは三人称の意味しか持っていなかったにも拘らず更にその意味は広がって受動形の指示辞、或は文法的道具 (*outil grammatical*) のような機能を持つものへと発展していった。(受動形と敬語表現とは深い内的なつながりがある。例えば日本語でも尊敬と受身の助動詞は共に、*れる*、*られる* であって全く同形である。)しかし、*di-* の持つ機能は三人称の人称の意味と単なる受動形を示す文法的道具との間を、現在、浮動している。

Telah tjukup, ibu. Silakan orang minum. (Isk, p.38) <もういいでしょう、お母さん。どうぞ皆さん方お飲みになって>

の例では *orang minum* は *diminum* <皆さん方が飲む>であってもよい。これを *di-* とせずに *orang* を用いたのはそこに作者の *di-* の三人称の機能を強めようとする意識が働いたからである。又、(3)(4)の三人称について *di-nja* の形があった。接尾辞である代名詞 *-nja* には<彼、彼女、この、あの>という三人称の意味がある。これを *di-* の形に更に附して用いるのは、受動的機能へと傾きやすい *di* を後から更に主語が三人称であることを明示するために補強しようと

するものに外ならない¹²⁾。同様の理由により orang<人>が di- orang の形で用いられることも多い。但し、この場合も orang には強い意味はなく、只単に三人称の漠然とした不確定的な人を指すに過ぎない。しかし di-の三人称としての機能を補足しているのである。

Surat diterima orang di Batipuh. (Hmk, p.108) <手紙は(人が) Batipuh で受取った>

Pada malam itu tidak dapat diketahui orang darimana asal api. (Isk, p.172) <その夜、火元はどこなのか(人が)分からなかった>

このような di-の持つ機能の揺れは既に古代マライ文学において存在していた。

Maka dilihatnja Hang Djebat mengusir orang diluar negeri itu. (HHT) <彼等が見たのは人々を国外へと追撃する Hang Djebat であった>

Maka hidangan pun diangkat oranglah dihadapan Seri Rama. (SM) <食事は亦人々が Seri Rama の前へと運んだ> (-lah は強調を表わす接尾辞。)

このように di-の持つ広い三人称的意味が-nja, orang で補強されて表わされている外に、di-の敬語的側面が利用されて di-は尊敬の、又は尊敬に価するニュアンスを含む語と共に用いられることが古代マライ文学において特に多い。

Apakah jang diambil entjik tadi?(SM) <先程何を貴方様が取ったのですか>

aku dititahkan radja membunuh engkau. (HHT) <私は汝を殺すよう王が詔した>

keris ini keris aku dianugerahkan Betara Madjapahit.(HHT) <この短剣は私のものであって Madjapahit 国王が賜わった>

Mndah-mudahan dikurniakan Allah subhanaku wata'ala kepadanja seorang anak. (HPT) <願わくば神の讃美が一人の子供である彼のところへ授けられるよう>

このように di-がその受動の指示辞的機能を拡大してゆくと共に、言語意識的には di-を oleh <によって> (もとの意味は<において>, 参照V.) で受けようとする傾向を促がした。しかし di-はもともと三人称の dia に由来するのであるから、その意識は依然として残っており、di-oleh の形式で oleh に続く品詞は三人称的なものに限られている。この形式も既に古代のマライ文学において現われている。

Setelah dilihat oleh orang banjak Laksamana sudah masuk kedalam astana. (HHT) <大勢の人によって見られた後、海軍大將は宮殿へはいった>

Maka oleh Tun Biadjid isterinja itu ditalaknja. (SM) <Tun Biadjid によって、彼の妻は離婚させられた>

この後の例にあるように ditalaknja のnjaは三人称としてのdi-を補強しているのであり、更に oleh が用いられていることによって di-の受動形の辞示辞としての機能も意識せられていることが分かる。このように di-はこの両者の間を既に古くから揺れ動いていたのである。特にこの di-oleh の形式では oleh の後に三人称に属する固有名詞、普通名詞が用いられることが多く、Tun

Ali itu *dibunuh oleh* Tun Isap. (SM) <Tun Ali は Tun Isap に殺された>という形はあっても Tun Ali itu Tun Isap bunuh. という形はあまり見られないことから、(3)(4)の三人称形にそのような品詞が出てきた場合、Andjing itu si Amin pukul. <その犬は Amin 君が叩く>, Si Amin pukul andjing itu. <Amin 君が叩くのはその犬だ>の形を正しいとする説¹³⁾とこの形は誤りであってこのような場合 Andjing itu dipukul (oleh) si Amin. Oleh si Amin dipukul andjing itu. としなければならないという説¹⁴⁾とが対立している。後者はdi-の位置にdiaが立つことも認めず、di-nja, di-olehnja の形式でなければならないことを主張する。即ち、di-の三人称的機能よりも受動的機能を強く認め（故にこの説にとって nja, olehnja を附することは不可欠である）、そのような三人称の受動的接頭辞 di-と平行的に一人称、二人称の ku-, kau-を同じ機能を持ったものとして見ようとするのである。ここに di-から始まってその機能を kau-, ku-にまで追進めて解釈しようとする受動態論者の考えが立起る。しかしこの説の主張者は(4)の形式に三人称の本来的な形である dia が現われることもあることを敢えて無視しようとしている。

Dia hampiri anak itu. (Hmk, p. 27) <彼がその子に近附いた>

di-には確かに受動的機能があることも認めなければならない。しかしそれは di-の機能の凡てではない。そこには依然として三人称の *dia* と等しい意味が含まれている。このような di-の機能の一面のみを他の人称にまで及ぼして考えることは不当であるというのが私の意見である。

di-は将来、単なる受動形の指示辞のようになるかも知れない。しかし S. T. Alisjahbana のようにこの di-を凡ての人称形に及ぼして使い得るという考え方には、にわかに承服できない。(3)の一、二人称形についていえば、彼は次のような形式が既に存在すると考えている¹⁵⁾。

Andjing itu dipukul oleh aku.

— — — oleh engkau.

彼の説は、di-がもとは三人称の *dia* であったことがすっかり不明瞭になり、数人の人に *Ibu* diberi uang oleh saja. <母は私によってお金が与えられた>という文について尋ねてみても、この文が正しくないことは全く気附かなかったという報告¹⁶⁾によって立証されるかも知れない。しかし、この報告者が誰であったのか明らかでない上に、di- oleh aku, di- oleh engkau が文学の上に現われている例もない。そのような表現法は、インドネシア語使用者に奇異の感じを与えずにはまだ受け容れられないというのが実状である。Alisjahbana 自身はその実例として文学作品 (Hamka: Dalam Lembah Kehidupan, p.7) から次の例を掲げている¹⁷⁾。

Kata orang djika *dimakan* aspirin, jang harganja hanja lima sen, demamku akan sembuh. <もしたった五銭のアスピリンを飲むなら、私の熱は直ぐに下がるだろう>

しかしこの引用例は彼の意図に反して di-は単なる受動形の指標ではなく（又、oleh saja という語も使われていない）既に述べたように<一般的に誰でも>の意味で使われている。<私によって飲まれれば>ということでは決してない。彼の di-に対する見解も、単なる憧れである。現実的ではない。

V. Oleh の導入について

上に述べたように既に古く di-の持っていた三人称の意味はその機能を尊敬表現へと移し、更に受動形の文法的道具としての働きを持つ方向へと拡大していった。そしてそれは oleh という品詞を招くことにもなり、益々、<…によって…れる>という形式を整えつつある。(しかしそれはあくまでも三人称に限られていて、一、二人称にはまだ及んでいないこと、その理由は di-が三人称 dia に由来しその意識がまだ残っているからであることは注意しなければならない。) この oleh が di-の形式に容易に結びついていったのにはその原因がある。oleh は元来<において>ということであって、その後接尾辞的人称代名詞を従えて次のようにいわば受動的ニュアンスを持たせて用いられていたことによる。この例は特に古代マライ文学に多いが、現在あまり現われることはない。

djikalau aku mati olehnja. (HHT) <もし私が彼において死ぬならば(もし私が彼によって殺されるならば)>

は、現在ならば djikalau aku dimatikannya (dimatikan olehnja). のように di-を用いるところであろうが、古代マライ文学においては di-が漠然とした不定の人、敬うべき人に対して用いられることの方が多く、そうでない場合 di-をとらずに oleh によって表現されたせいである。

tiadalah berketahuan olehnja lari itu. (HPDj) <それが逃げたことは彼において知らなかった(彼によって知られなかった)>

このようにして用いられる oleh が、意味的にみても受動形の機能を持つ di-と結合することは容易であろう。更に、

Djika tiada engkau mati olehku, aku mati olehmu. (HHT) <もしお前が私において死なないならば、私がお前において死ぬ(もし私がお前を殺さなければ、私はお前に殺される)>

は、現在、Djika tidak engkau aku matikan (kumatikan), aku engkau matikan (kau-matikan). とするところであるが、この例にもある olehku, olehmu の形が既に問題にした di-oleh aku, di-oleh kamu のような形式への動きを見せ始めているということができよう。

又、現代においても olehnja が用いられることは、少々 archaic な感じを与えはするけれども皆無ではない。

Ada pantun-pantun ajahnja yang telah hapal olehnja. (Hmk, p.3) <彼において暗記した父の(教えてくれた)四行詩がある>

banjak orang minta-minta bersua olehnja sepanjang djalan kerumah. (Isk, p.34)
<大勢の乞食が家への帰り道で彼において出会った(帰り道で彼は大量の乞食と出会うのを余儀なくされた)>

VI. 動詞の弱体化現象

既に明らかにしたようにインドネシア語の動詞は、語根に附される接頭辞によってその性質が決定され、目的語文、二重主語文、主語文のような特性を文に与える。しかし、現在、そのようなインドネシア語的な動詞の特性は少しずつ失われ始め、ある一つの決った型 (pattern) の中の一部分—要素としてしか機能しないような動詞の新しい傾向が生れてきている。型の概念は西欧語において著しくそれを見ることができる。インドネシア語の先に述べた受動的表現法 *di-oleh* は動詞の一つの特殊な機能として発現した二重主語文、主語文から新たな論理へと変化しようとするものであるし、それを全人称にまで及ぼそうとする規則化の傾向すらも顔を出している。更に、(3)(4)の形式について説明を試みた時に述べたように、この場合人称代名詞と動詞との結びつきは固く、この間に何らの他の品詞をも挟込むことはできないけれども、それを敢えて犯そうとする傾向すら現われている。これを西洋語（特にオランダ語であろう）の影響という人もあれば¹⁸⁾、西洋語の情報を速かに摂取するためそれをインドネシア語に翻訳するに際してのマス・コミの影響に帰する人もいる¹⁹⁾。要するに西欧語の持つ動詞の概念にインドネシア語の動詞を近附けつつあり、ある型の中にはまっておりさえすればよく、本来のインドネシア語の動詞が持つ特殊性は薄れかけてきている。これを現代インドネシア語における動詞の機能の弱体化現象と見ることができる。しかしこの現象がインドネシア語文法に全般的に影響を与える段階には致っていない。しかしわれわれはその動きを常に見守っていなければならないであろう。その一例として²⁰⁾、

Dan dengan demikian tuan telah ikuti kelahiran seorang pengarang. ((4)形である。

実際は、*telah* は *tuan* と *ikuti* との間には置くことができない。) <そしてこのようにして貴方が一人の作家の誕生に参与したのです>

VII. 態への批判説

インドネシア語に能動、受動といった態の区別が存在しないと考える代表的意見は、C. A. Mees と A. Pané とによって呈出されている。Mees によれば²¹⁾ (1)(2)形と(3)(4)形とは夫々、状態・状況 (*keadaan*) と出来事 (*kejadian*) とを表わすという点で対立し、前者が(2)で分かるようにその動詞 (*me-*+語根) が名詞的性格を帯びることのできるのに反し (故に彼はこの形を *nomen verbal* <動状名詞> と呼ぶ) 後者は代名詞が動詞と固く結ばれている (故にこの形を *bentuk persona* <人称形> と呼ぶ)。この両者の用いられ方を見ると(1)(2)はその文の機能が非限定的 (*infinit, tak-tentu*) であるが、(3)(4)は限定的 (*finit*) である。故に、もし文中に初めて現われる人物があれば、その人物に関して *nomen verbal* が用いられ、以後、その人物は *bentuk persona* で述べられるというのである。例えば、

Maria menjambui teh itu, tetapi oleh karena masih panas, *diletakkannya* disisinya

diatas batu. <Maria はお茶を受取った, しかしまだ熱かったので, 石の上の縁に置いた>
しかし, 彼自らもいっているように状態・状況と出来事との間は非常に微妙である。次の例は
Selasih の Kalau Tak Untung から取られたものであるが, Umar Junus も指摘しているよ
うに²²⁾ Rasmani という人物は初登場するわけではなく, 前文に既に現われている人物である。

Karena ia seorang bekerdja, dan tjukup urusan jang akan merintang hatinja, dapatlah
djuga Rasmani *menghilangkan* wajah Masrul jang selalu terbajang-bajang dimatanja.
<彼は一介の労働者であり, 心を慰さめてくれるような仕事も充分にあったので, Rasmani
は彼の目にいつも影を落とす Masrul の顔を見無視することもできたのである>

このような例外的な用法は数多く指摘することができ, Mees の説明はあまりに専断的 (arbi-
trair) であるとする非難も起こってくる²³⁾。しかし Mees の態に対する考え方は, インドネシ
ア語文法に能動, 受動の問題は存在しないといいきっている²⁴⁾ことから明らかである。

一方, Pané は²⁵⁾インドネシア語には能動, 受動の問題が存在しない理由として, そのような
態の区別は元來動詞の活用 (conjugatie) に関係しているものであり, インドネシア語ではそのよ
うな活用は全く存在しないことを指摘し, 更に, イントネーションに注目しても文の中心となる
もの (pokokkalimat) 即ち主語は高く発音され (彼に従えば(1)の pokokkalimat は Aku, Eng-
kau, Dia, (4)は Aku pukul (Kupukul), Engkau pukul (Kaupukul), Dia pukul (Dipukul-
nja)), 文を説明するもの (keterangan-kalimat) 即ち述語は主語より低く発音される (彼に従
えば(1)の keterangan-kalimat は memukul, (4)は andjing itu)。又, (2)を(1)の, (3)を(4)の語
順転倒 (inversi) と見ることも当たっていない。何故ならば(2)(4)における各語のイントネーション
はもとのイントネーションから変化し, 主語, 述語という関係も変わってしまっているからであ
る。インドネシア語では関係代名詞, 前置詞, 接続詞, 間投詞以外の凡ての品詞は同じ価値を持
っており, そのいずれもが pokokkalimat となることができ, 又, keterangan-kalimat とな
ることができる, つまりイントネーションにもそのような態の区別を明確にするような何の機能
も見出せないと述べている。そして彼は(1)についてはその意味される事柄が継続的であるとして
duratief と名付け, (4)については瞬間的であるとして momentaan と呼ぶ。duratief 形では行
為者がより顕著であり, 又, 行為, それも行為者の行為が一層強調されていて時間的には現在,
現在完了を表わすのに反し, momentaan 形は被行為者が一層顕著になり, 又, 行為の結果が強
調され完了を表わすと説明する。しかしこの説明は要領を得て明確であるけれども, 実際にはそ
こから外れる例が多い。とはいえ Pané の功績は, これまでいわゆる能動態, 受動態と考えら
れてきた二つの形式を夫々が裏腹をなすものとしては扱わずに各々が独立した文型として存在す
るとしその特徴を考察した点にあるといえる。

インドネシア語の受動態が能動態の裏返しとして存在するという考えは西欧語から持込まれた
という指摘にもあるように²⁶⁾インドネシア語の態についての考え方は(1)の形式を西欧語の概念か
ら能動態として規定し, 更にその対立概念である受動態はどのような形かという外形的な探索

方法でインドネシア語の文法が作られてきた。van Pernisが述べるところによれば²⁷⁾印欧語においてすらもともと現在いわれているような意味での受動態は存在しなかったことに言及しつつ、インドネシア語においてそのような態の区別が A. A. Fokker によって導入されて以来、J. Gonda, M.G. Emeis 等の反対意見にも拘らずその後今まで引続いている。しかし言語は論理 (logika) ではなく、又、本来的に活用、語尾変化を持たないインドネシア語においてそのような論理的範疇である能動態受動態の区別がなくても不思議ではないという彼の意見は傾聴に価するであろう。

VIII. 二重主語文

インドネシア語文法においてこれまで一般的に受動態とみなされてきた(3)(4)の形式は、二重主語的な表現形である。(3)(4)夫々の形式は基本的に次のように表わすことができる。

(3)……N₁—N₂・V <…は…が…する>

(4)……N₂・V—N₁ <…が…する, …は (但し日本語では<…が…するのは…だ, …が…を(に)…する>) >

N₂・V の結びつきは固く、それが一つのまとまりをなしていて切放すことができない。Nは、夫々、主語であること (N₁ は第一主語, N₂ は第二主語), Vは接頭辞 *me-*を伴わない動詞 (但し接尾辞 *-kan, -i* がその動詞の要求するところに応じて附されることはできる) を示し, N₁は日本語の<…は>, N₂ は<…が>に大体当ると解釈でき、日本語での意味は上に掲げたようになる。このように(3)(4)形を解釈することは、インドネシア語の文の構成上の線条性 (連続性) の点から考えても一層妥当である。但し、三人称形の場合、IV.で述べたようにその短縮形 *di-*が受動的意味を持つ方向に強く傾きそのように解釈してよい場合も少くない。N₁, N₂ を日本語の<…は>, <…が>に大体当るといったのには意味がある。インドネシア語の N₁, N₂ の現われ方と日本語の<は, が>とは凡ての場合において対応するわけではなく細部においてくい違っている。例えば、<フット・ボールは彼が好きだ (野球は僕が好きだけれども)> に対して (3) 形により *Sepakbola itu dia sukai (disukainja)*. とできるが、<彼はフット・ボールが好きだ> について *Dia sepakbola sukai, Dia disukai oleh sepakbola itu*. とはできない (この場合<彼はフット・ボールによって好まれる>という意味)。後者は *Dia menjukai sepakbola itu*. <彼はフット・ボールを好む> という(1)形でしかいえない。(但し、*menjukai* を自動詞的に *suka akan (kepada)* としてもよいが、ここでは問題としない。) 又、インドネシア語では疑問詞も N₁ の位置に立ち得るが、日本語でこれを<…は>とすることはできない。

Apatah kita perbantahkan? (HHT) <何をわれわれが云争っているのか>

のように N₁ を<何は>ということとはできない。しかしこれは(3)形である。同様に、

Mana jang dapat saja tolong. (Hmk, p.125) <どんなことでも私がお助けすることができます>

siapakah lagi jang akan kutimang-kutimaug~? (Hmk, p.16) <更に誰を私が愛したらいいのだろうか>

日本語の<は、が>についてはそのみで考察の対象にするべき事柄であるが、インドネシア語の二重主語文を日本語の<は、が>との関連において誤解することがあってはならず、インドネシア語の(3)(4)を構成する形式はインドネシア語独自の文法の見地から二重主語文とみなさなければならぬ。

1. 二重主語文の例： $N_1-N_2 \cdot V \cdots (3)$, $N_2 \cdot V-N_1 \cdots (4)$

(3) *maka engkau akan kumakan!* (HSK) <さてお前は私が食ってやろう>

” *Ikan ini baiklah kita ambil.* (HPDj) <この魚はわれわれが取ってよろしい>

” *Wang iu mesti mamak perniagakan sebagai biasa.* (Hmk, p.17) <そのお金は伯父さんがいつものように商売に使うべきです>

” *Mengapa bahasa kita sendiri akan kurang kita hormati?* (Sing, p.27) <何故われわれ自身の言語はわれわれがあまり敬意を払わないのであろうか>

” *adat orang di Minangkabau lain sekali. Bangsa diambil daripada ibu.* (Hmk, p.21) <Minangkabau における人々の慣習は全く異なっている。家系は（その地方の人々が）母方から引継ぐ（母方から引継がれる）>

(4) *Dia hampiri anak itu.* (Hmk, p.27) <彼が近附いた、その子には（彼がその子に近附いた）>

” *Hai orang kaja Laksamana, karena sebab orang kajalah maka kuperbuatkan pekerjaan ini.* (HHT) <金持の海軍大将よ、金持だからこそ私がするのである、この事は（私がするのはこの事だ）>

” *Mengapa kaulepaskan kaki Sang Kerbau tadi?* (HSK) <先程何故お前が離したのか、水牛の足は（何故お前が水牛の足を離したのか）>

” *Saja akui, saja orang dagang melarat dan~jatim dan piatu.* (Hmk, p.37) <私が認めます、私は貧しい商人でありそして…孤児であることは>

” *Lehih baik kita tekankan perasaan hati.* (Hmk, p.17) <われわれが押えるほうがよろしい、感情は（われわれが感情を押えるほうがよろしい）>

2. その変形： $N_1-jang-N_2 \cdot V \cdots (3)$

jang は発生的にはカウィ語 *nya-ng> ia-ng* <その彼、そのそれ>に由来するが、現代のインドネシア語では関係代名詞のように用いられている。しかしその機能は N_1 を *jang* で受けて N_1 を再び繰返すという強調にあった。もっともこの意識は現在薄れつつあり、*jang* は N_1 と $N_2 \cdot V$ を結ぶために単に形式的に置かれるに過ぎない場合も少くない。又、 $N_2 \cdot V-jang-N_1$ という形は存在し得ないことは上の説明から明らかであろう。

Dia, jang Sus idam-idamkan. (Isk, p.22) <彼女、（彼女は）Sus が熱望しているのだ>

Renda jang engkau serahkan~telah hampir selesai kukerdjakan. (Hmk, p.33) <レース、（それは）貴女が譲ってくれたのだが、…殆んど仕上げるまでに私が細工しました>

Apatah jang ditakutkan. (HHT) <何を(皆が)恐がるのか>

3. その変形: $N_1-N_2 \cdot V-C(\text{Complement})\cdots(3)$, $N_2 \cdot V-N_1-(\text{jang})-C\cdots(4)$

N_1 の行為, 状態, 性格を示す語を N_1 の補語 (complement) とすると, その位置は上に示したようになる。(4)形の *jang* は, ない場合もある。

- (3) *tetapi engkau kudengar sudah mati.* (HHT) <汝は私が聞くとくによれば, 既に死んでいる(汝は死んだと私が聞いている)>
- ” *dapatkah engkau kutitahkan pergi kerumah Laksamana itu.* (HHT) <汝はその海軍大将の家へ行くよう私が詔することを得るか>
- ” *saja kau larang masuk.* (Hmk, p.212) <私は汝が禁じた, 中には入ることを(私は中には入るのを汝が禁じた)>
- ” *meraka itu jang Sus katakan kawan setjita-tjita?* (Isk, p.217) <彼等は同志だと Sus が云っているのか>
- (4) *Tjoba kau lihat tikar buruk jang hanjut itu!* (HSK) <ちょっとお前が見てごらん, 漂っている(ところの)破れた筵は>
- ” *Apatah dosa telah kuperbuat dari dahulukalanja, maka kuperoleh anak jang demikian?* (HPT) <上代からどんな罪を私が犯したというのだろう, 私が得たのがこのような子供であるとは>
- ” *Belum Sus lihat lagi isteri si mati melompati api, sudah begitu perasaanmu.* (Isk, p.25) <死者の妻が火に飛掛かるのを Sus がまだ見ていないのに, もうそんな気持ちになるなんて>
- ” *Mereka katakan itulah kemadjuan.* (Hmk, o.85) <彼等が云うには, その事こそ進歩である>

4. その変形: $\text{jang} (=N_1)-N_2 \cdot V\cdots(3)$

jang が N_1 になっていて, あたかも英語の *what* (=that which, those which) のような機能を持つ。発生的には上述したように<それ, 彼>の意味があったが, 現在では関係代名詞的に<ところのもの(こと)>と訳される。 $N_2 \cdot V-\text{jang} (=N_1)$ の形は存在しない。

Jang akan saja bawa hanjalah sekedar ongkos kapal ke Padang. (Hmk, p.17) <(それは)私が持ってゆくのだが(私が持ってゆくのは), 只, Padang へ行くために必要な船賃だけだ>

Ada jang akan kuterangkan kepadamu. (Hmk, p.69) <私が貴方に説明することがあります>

5. その変形: $N_2 \cdot V$

既に明らかにしたように(参照31~32頁)能動態の目的語が重視, 強調されて受動態の主語になるという考えが全く当らない形がこれである。 N_1 は分かりきったこと, 既に了解ずみのことで

ある場合、外形的な姿をとって現われない。又、 N_1 が欠けていることによってこの形は(3)からも(4)からも期待される。私はこの形を主語文と名附けた（参照 III）。

maka *kuambil* pula daripadamu. (HHT) <（短剣は）私がお前から取上げてやる>

Tjoba *kauangkat* sekali lagi, Sang Kerbau, supaja dapat *kulihat*. (HSK) <ちょっともう一度（その棒は）お前が持上げてごらん、水牛よ、私が見ることができるように>

Mamak perniagakan, dan beruntung. (Hmk, p.14) <（そのような沢山のお金は）伯父さんが商売をして、そして儲けたのだ>

Dikalau tiada *datuk* anugerahkan, gilakah sahaja mengambil dia? (SM) <もし（その船は）閣下がお恵み下さらないのなら、私がそれを取ることは変でしょうか>

6. その変形： $N_2 \cdot V - N_1 - N_2' \cdot V'$

N_1 が N_2 と(4)形を構成し、その N_1 が更に N_2' と(3)形を構成して N_1 は二重の機能を負っている。インドネシア語のシンタックス上の単純さを示す一つの好例といえる。

Apabila *aku* ikat *Tun Isap* *aku* antarkan. (SM) <私が縛るのが *Tun Isap* であつたら、*Tun Isap* は私が送り届けよう>

IX. おわりに

インドネシア語のこれまでいわれてきた受動態なる形式が言語学的に見ても何らいわれのないことが以上で明らかになったかと思う。それは誤れる西欧語の概念に固執した結果起こったものであった。しかし受動的表現法への形式化が既に三人称形において蠕動し始めていた事実も見逃すわけにはゆかない。ただ将来これがどのように発展してゆくかは誰も予測できない。われわれが行なうべきことは現実の現象を細部に互って見極めめることである。インドネシア語の受動態が実は二重主語文であることを本稿で説き明かした。しかしインドネシア語の二重主語文的構成法はこの現象に尽きるわけではない。その文の性質は異にするけれども、むしろ一般的にはこの方をもって二重主語文といわれる属性的な形式を中に含むところの文がある。例えば、*Saudagar itu, anaknja* sakit. <その商人は子供が病氣だ>、*Bapak itu* kematian *anaknya*. <父は子供が死んだ>に見られる形式であつて、この形も既に古くインドネシア語（マライ語）に現われている。このようにインドネシア語における二重主語文的発想法はその範囲が非常に広い。しかし後の問題について論ずるのは別の機会に譲りたいと思う。

尚、インドネシア語の受動態の問題のみを扱って一冊の書物にまとめた J. Wils (*Het pas-sieve werkwoord in de Indonesische talen*, VKI, Deel XII, 1952, 247pp.) のことを附しておく必要がある。この大著にも拘らず、彼は能動態受動態の区別が凡ての言語に普く存在する現象であると考えた出発点にそもその問題があり、更に、インドネシア語の受動態の形式をインドネシア語派に属する他の言語（特にジャワ語、タガログ語）との外形的な比較によってのみ立証しようとするのである（私はジャワ語の受動態も本稿で説いたようにインドネシア語と同様

の二重主語文であると解釈している。但し、接中辞 *-in-* による形式は除く)。しかも実際のインドネシア語の文例に当ってその語感をじかに感じ取りつつ論を進めるようなことはなく、単に理論のこね回しに終始し、かえって問題を紛糾させて何らの説得力をも持たせ得なかったことは惜しまれる(《Une définition qui contient un cercle vicieux ne définit rien.》——H. Poincaré)。

註

- 1) 若干の語において例外的に *me-* は自動詞的に用いられることもある。*menari* <踊る>, *menangis* <泣く>。又, *me-* と共に更に接尾辞 *-kan*, *-i* を附して目的語を取るために用いられることも多い。しかしここでは煩を避けるため除外して考える。
- 2) S.Zainu'ddin: *Pohon Bahasa*, Djakarta, 1960, Djil. II, pp.65~.
文法的、心理的に主語を区別することは古來行われている。しかしこの二つをどこに限界を置いて区別するのかまだ曖昧であるし、特にインドネシア語のような比較的自由的な語順を持つ言語においてその実効性は益々疑わしい。故に私は文法的、心理的という用語を敢えて用いない。
- 3) 例えば,
M. Lubis: *Parama Sastra Landjut*, Amsterdam-Djakarta, 1952, p.76.
S.M. Zain: *Djalan Bahasa Indonesia*, Djakarta, 1954, p.34.
S. Zainu'ddin: *Pohon Bahasa*, Djakarta, 1960, Djil. II, p.63.
S.T. Alisjahbana: *Tatabahasa Baru Bahasa Indonesia*, Djakarta, 1963, Djil. II, p.31.
- 4) *Pembina Bahasa Indonesia* (PBIと略), Tahun III, Maret 1951, p.279., PBI, Tahun IV, Djuli 1951, pp.21~.
C.A.Mees: *Tatabahasa Indonesia*, Bandung, 1953, pp.312~.
- 5) Oe.Soerjaman: *Kalimat aktif dan kalimat pasif dalam Bahasa Indonesia*, PBI, Tahun IV, April 1952, p.297.
- 6) S.T. Alisjahbana: op. cit. Djil. II, p.31.
- 7) H.Munaf: *Tatabahasa Indonesia*, Djakarta, 1951, Djil. I, p.178., S.T. Alisjahbana: op. cit. Djil. II, p.34.
- 8) M.Lubis: op. cit. p.84., S.M.Zain: op. cit. p.34.
- 9) PBI, Tahun IV, April 1952, p.298.
- 10) H.Munaf: op. cit. Djil. I, p.198.
- 11) S.T. Alisjahbana: op. cit. I Djil. II, p.31.
- 12) この *di-nja* の *nja* について S.M.Zain は大きな誤った解釈をしている (op. cit. p.34)。彼によれば (3) 形の *Andjing itu dipukulnja* の *nja* は *andjing* を指すという。この説が間違いであることは、既に述べたように接頭辞 *me-* を取らない *pukul* には他動詞性は全くなく、そのような目的語としての *nja* を取ることはできないからである。但し, *Andjing itu dia memukulnja* とすることはできる。<その犬、私はそれを叩く>という二重目的語的表現になる。*andjing* は *nja* で再び受けられて *memukul* の目的語となっているからである。
- 13) H.Munaf: op. cit. Djil. I, p.178., S.T. Alisjahbana: op. cit. Djil. II, p.34. 後者は Hikajat Sultan Atjeh Marhum から次の例を掲げてその正当性を主張する。Arkian bagindapun bermusjawaratlah dengan menteri hulubalang serta orang-orang besar peri hal perdjalananan serta pekerdjaan jang hendak *baginda* lakukan itu. <更に陛下は武官、高官と共に陛下が行なおうとしている旅行、事業について協議した>。

- 14) M.Lubis: op. cit. p.84., S.M.Zain: op. cit. p.34.
- 15) S.T.Alisjahbana: op. cit. Djil. II, p.34.
- 16) PBI, Tahun IV, Djuli 1951, p.23.
- 17) S.T.Alisjahbana: op. cit. Djil. II, p.33.
- 18) A.Singgih: Peladjaran Bahasa Indonesia untuk Bangsa Asing, Djakarta, 1956, p.28.
- 19) M. Lubis: op. cit. p.84.
- 20) S.Pant: Gejala-gedjala baru, Medan Bahasa, Nomor 1 Tahun VI, Djanuari 1956, pp.5~7. この
中の一例を掲げるに止める。例は Madjalah Seni, No.1, 1955, p.23. からのもの。
- 21) C.A.Mees: op. cit. pp.185~, pp.221~.
- 22) U.Junus: Persoalan disekitar posisi „kalimat pasif” dalam Bahasa Indonesia, Medan Ilmu Penge-
tahuan, Nomor 3-4 Tahun III, Djuli-Oktober 1962, pp.618~.
- 23) U.Junus: op. cit. p.620.
- 24) C.A.Mees: op. cit. p.315.
- 25) A.Pané: Mentjari Sendi Baru Tatabahasa Indonesia, Djakarta, 1950. 尚, 450頁に及ぶこの書物の
能動態受動態に関する見解のみを要領よくまとめた Aktif dan Pasif, PBI, Tahun V, September 1952,
pp.65~73. は参照に便利である。
- 26) R.I.W.Dwidjasusana: Parawa Sastra Indonesia Modern, Surabaya, 1965, p.72.
- 27) H.D.van Pernis: Soal aktif dan pasif, PBI, Tahun V, September 1952, pp.74~78.

〈補1〉 kalimat subjek, kalimat objek という用語を S.M.Zain (op. cit. p.34, p.98.) も使用している。

しかし受動態論者の一人である彼はその用語を態の概念の区別のもとに作ったのであり受動態の主語は
能動態の目的語であるから受動態を kalimat objek と名付け、能動態は主語—述語—目的語という基本
的な構成法を持つから kalimat subjek と名付けたに過ぎない。ここには態の概念についての反省は何
ら見られないのであって私の提案（但しその呼称は結果的には Zain のものと逆になっている）した用
語とは、もとよりその内容を全く異にする。

引用書目略語解説（掲載順）

- Hmk: Dr. Hamka, Tenggelamnja Kapal van der Wijck, Djakarta, Tjetakan IX, 1963.
- SM: Sedjarah Melaju, Menurut terbitan Abdullah dan dibeli anotasi oleh T.D.Situmorang dan Prof.
Dr. A. Teeuw dengan bantuan Amal Hamzah, Djakarta, Tjetakan II, 1958.
- HHT: Hikajat Hang Tuah, Disalin dari naskah tulisan tangan huruf 'arab kepunjaan Koninklijk
Bataviaasch Genootschap, Djakarta, 1948.
- HA: Hikajat Abdullah, R.O.Winstedt & C.O.Blagden: A Malay Reader, O.U.P., 1930. より。本稿では綴
字をインドネシア語式に改む。
- Isk: N. St. Iskandar, Djangir Bali, Djakarta, Tjetakan III, 1964.
- HPT: Hikayat Pancha Tandëran, Di-tërmëahkan oleh Abdullah bin Abdul Kadir Munshi, Kuala
Lumpur, 1965. 本稿では綴字をインドネシア語式に改む。
- HPDj: Hikajat Pelanduk Djenaka. 上掲, A Malay Readerより。本稿では綴字をインドネシア語式に改
む。
- HSK: Hikayat Sang Kanchil, Di-chëritakan Këmbali oleh D. Baharum, Kuala Lumpur, Chetakan III,
1966. 本稿では綴字をインドネシア語式に改む。
- Sing: A.Singgih, Membina Bahasa Indonesia, Djakarta, 1963.